

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」（平成21年度採択）

事後評価

番号	研究名	研究代表者	評価
21-3	複合データによる道路サービス・パフォーマンス情報システムの研究開発	筑波大学大学院 教授 石田 東生	C
<p><研究の概要> ※成果報告レポートより引用</p> <p>本研究は、従来の路側観測によって得られる交通データとプローブカーデータを融合させることによって、多様なニーズに対応可能な道路パフォーマンスデータの作成と、より安価かつ他国でも適用可能なデータ収集方法を検討しようとするものである。</p> <p><事後評価結果></p> <p>本研究テーマの先進性は評価できるものであり、中間評価を踏まえ車両感知器データとプローブデータの融合に焦点を当てた研究は、今後の同種研究が目指すべき方向を示唆している。一方で、当初の研究目的である、従来よりも広域かつ高精度で多様な道路パフォーマンス情報を安価に提供可能なシステムの提案については、十分に達成されたとは言い難く、研究成果は一部に留まったと評価する。</p> <p><参考意見></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本テーマは今後の発展が期待される重要な研究分野であり、車両感知器データとプローブデータの融合に向けて、研究過程で得られた課題を生かす工夫を検討していただきたい。また、この分野に関する今後の研究に対し、さらなる研究への足がかりとするための提言事項や論点等を整理していただきたい。 2. 本研究で提案されている車両感知器データとプローブカーデータを融合したカルマンフィルターモデルの実現が期待される。 3. 研究終了報告書に記載されている通り、研究に使用されたプローブデータが乏しかったことが研究目的を十分に達成できなかった一因と考えられる。プローブデータの取得量が急激に増加している近年の状況を踏まえ、今後の研究継続により、豊富なデータを活用することで、研究目的の達成、道路政策の質の向上につながる成果を期待したい。 4. 研究目的は一部達成できなかった点もあるが、限定的なモデルではあるものの、道路パフォーマンス指標の算定モデルを構築し、一定の研究成果を達成している。 5. データ収集、解析の困難さなどの課題はあるが、今後の実務面への適用の基礎となるものであり、一定の成果は得られた。 6. この成果を実務に移行させるためには、解決しなければならないことが多く、資料収集システムを段階的に開発していく必要がある。 			